



大発生してブナ山を裸にしてしまうウエツキブナハムシですが、この虫、どのような生活史をしているのか書物を見つけれませんでした。そこで、生態の一端でも見られればと思い、採集した成虫と幼虫を飼育することにしました。

飼育ケース内には、オアシスにブナの枝葉をセットしました。幼虫のケースには蛹化場所？として底面に土と枯葉も入れました。

←成虫飼育ケース

8月28日(木)



成虫、幼虫とも相当な食欲ですが、人のいない夜間のほうが活発に食べているようです。どちらも表側がお気に入り、多量の糞が葉の上に乗っています。(野外ではすぐに落ちてしまうでしょうね)



食餌しながら脱糞



ツルツルのプラケースも自在に歩く

8月29日(金)



写真の目盛は1ミリです



新しい葉を入れるために、食痕だらけの葉を取り出したら、何やら黄色いツブツブが……。よく見ると他の葉にもたくさん付いています。どうやら卵のようです。多くは葉の裏側に産んでいました。

大きさは長径 0.9 mm、短径 0.6 mm 程度です。

9月1日(月)



葉についている幼虫は2匹だけになりました。

採集地でも葉上の幼虫は少なくなっていたので、そろそろ蛹化するのかもしれませんが。葉を離れて地面を這っている幼虫が確認できました。

成虫は相変わらずの食欲です。葉の陰を良く見ると、オアシスの上で菌にまかれた死骸がありました。寄生菌によるものでしょうか？



菌にまかれて死亡した個体 (寄生菌か?)

9月2日(火)



卵を別のケースに移し、余分な枯葉を清掃したところ、枯葉の下に菌にまかれて死亡した成虫と幼虫がみつかりました。死亡幼虫4頭のうち2頭は葉についた状態、残る2頭と成虫3頭は落下した状態でした。

大発生しても2～3年で終息するといわれていますが、この菌が鍵となる天敵のひとつなのかもしれません。土中に潜った（であろう）幼虫の運命やいかに。



菌により死亡した成虫(上)と幼虫(下)



死亡個体（上：幼虫、下：成虫）



9月4日(木)



卵のケース

産卵はほぼ終わったようです。

ブナは水揚げが悪く、深水切りをしても2日ほどで葉が乾いてしまいます。葉が乾くと卵も乾いてしまうように凹んでしまうものもありました。乾燥防止のために用意したのはコバエシャッターの小ケース。オアシスに十分水を浸み込ませ、葉が直接触れないように、少し浮かせて厚紙を敷き、その上に産卵された葉を入れました。孵化したらすぐ食べられるように新鮮な枝葉もオアシスに挿しています。

早い時期の卵の葉はすっかり枯れてしまいましたが、卵は充実しているようです。色が薄くなったのと、葉に走る菌糸?が気になりますが。



乾燥して凹んでしまった卵



最初の頃の卵はパンパンだが……



葉に付いたまま菌にやられた幼虫

幼虫はすべて葉を離れました。

葉に付いたまま菌にやられた幼虫が、また見つかりました。古い葉だったので最後の幼虫ではないようです。

地表や枯葉の下には幼虫は見られません。

土中に潜ったとしか思えないのですが、このまま掘り返さずにようすを見ようと思います。

9月5日(金)



多くの成虫が死んでしまい、生き残った成虫は少なくなってきました。彼らも食欲や活発さは低下しています。死亡した成虫の多くは菌で白くなっていました。菌の由来としては、①最初から虫体に付いていた、②餌とした葉（現地採取）、③オアシス、④飼育ケース、の可能性が考えられますが、山自体の防除体制が既に発動している（①②）と思いたいところです。一方、全く菌が見られず死亡した個体もありました。菌が見えないだけなのか、寿命なのか、あるいは飼育環境の不備なのかは、今後の検討課題です。



葉にとまったまま菌で死亡した成虫



↑ 落下して死亡している成虫



← 菌の発生の見られない屍骸もある

9月6日(土)

現地情報



飼育幼虫の採集地（ブナ林施業公園：標高 740 m）では、幼虫は全く見られなくなっていました。どこで蛹になっているのでしょうか？



当初は被害が目立たなかった大越峠（標高 920 m）付近でも葉枯れが際立ってきました。



大越峠付近の幼虫。大きさは8～9mmで、ブナ林施業公園の10日前とほぼ同程度です。食べ盛りです。

ブナ林施業公園と大越峠では、標高差 180 m で 10 日程度のズレがありました。単純に標高による発生状況の違いなのかを確かめようと、峠をはさんだ反対側の志津野営場（標高 770 m）周辺を見てみました。



志津野営場周辺も葉枯れが目立つ。さて、幼虫は？



標高からして幼虫の活動は終わっているだろうとの予測に反し、小さな幼虫がウジャウジャといました。大越峠の半分ほど、4～5 mm の大きさです。

発生時期は標高だけではなく、雪融けの時期や昨年の発生地との距離なども関係しているのかもしれませんが。

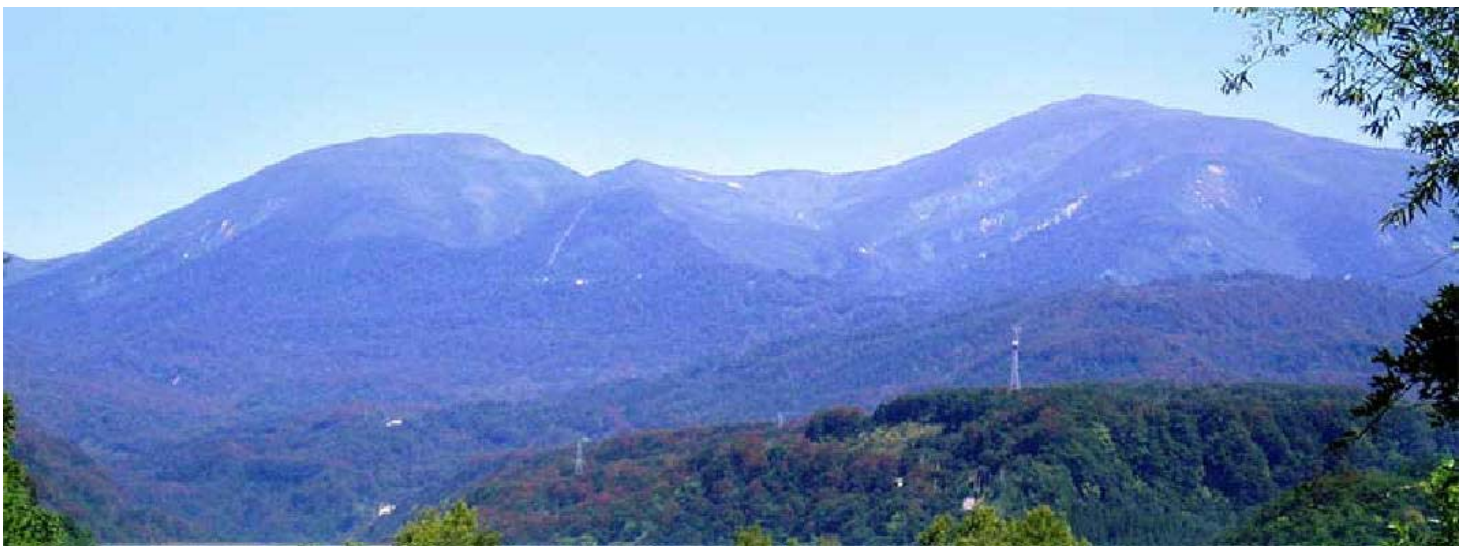
9月10日(水)



生き残っていた成虫も全て菌にやられ、飼育ケースに残っているのは土中に潜ったであろう幼虫と卵だけになりました。結局、菌が認められる状態で死亡した成虫は、採集した22頭のうち18頭(82%)でした。

卵は、凹んだものが増えたほかは変化ありません。幼虫のケースにも変化はありません。進展があればまたお知らせします。なんとなく全滅のような予感もしますが。

9月11日(木) **現地状況(月山南麓)**

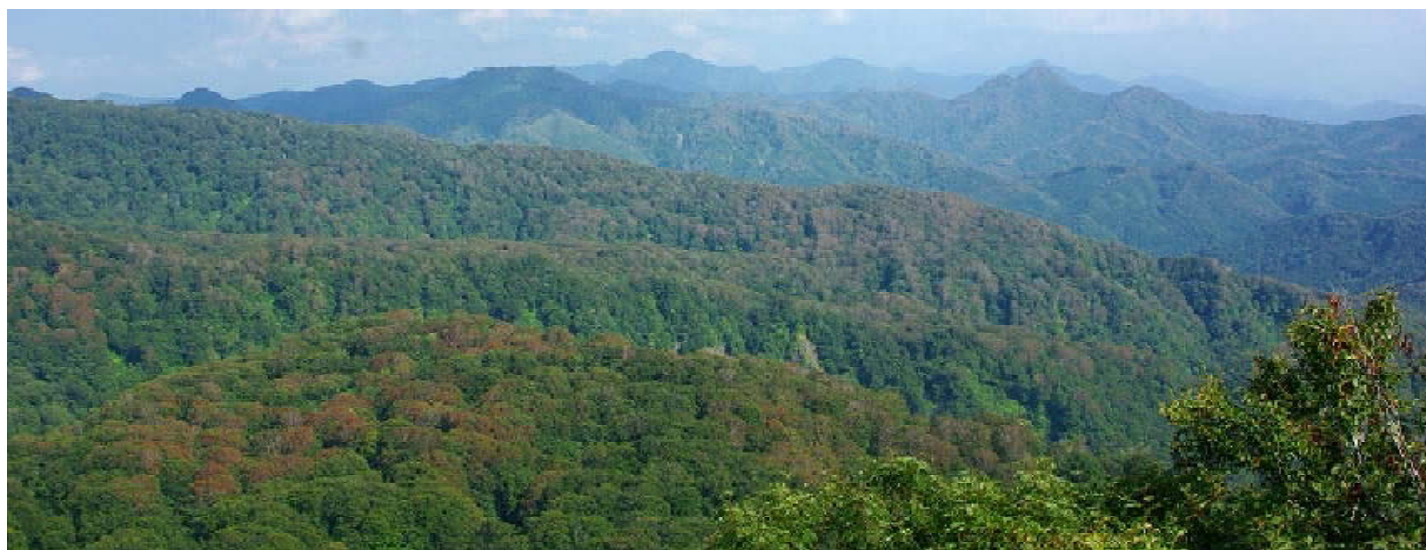


大井沢方向からみた月山。月山南麓にも広く被害が出ているのがわかります。

9月15日(月) 現地状況(鳥海山)



遊佐町から見た鳥海山 西麓の裾野一帯のブナに葉枯れが見られる



鶴間池周辺 (のぞき) から見た鳥海南麓

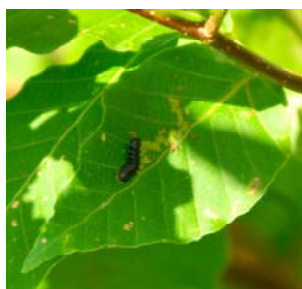


のぞき周辺の被害木



被害木をバックに飛ぶノスリ

終齢幼虫
10ミリ



鳥海山に行ってきました。ここでも広く被害が見られます。
鶴間池の展望台(通称「のぞき」、標高 970 m)付近では最大級(10 mm)の幼虫が多数見られました。この沿線の標高 800 m 以下では幼虫はもうほとんど見られませんでした。鳥海高原家族旅行村の自動販売機には潜りこんで死亡した成虫が確認できました。秋田県側から来た人の話では、北麓には被害は無いようだとのことでした。ハムシとは関係ありませんが、ハチクマなど鷹の渡りがたくさん見られました。

9月16日(火)

飼育ケースの**卵**のようすです。ケース上部のものはほぼ全てが凹んでいます。下部には菌がでているものもあり、そうでなくても黒ずんでいます。葉が枯れた時点で水分管理が非常に難しくなってしまったようです。卵の飼育は失敗に終わりました。



凹んだ卵



菌の出た卵



黒ずんだ卵

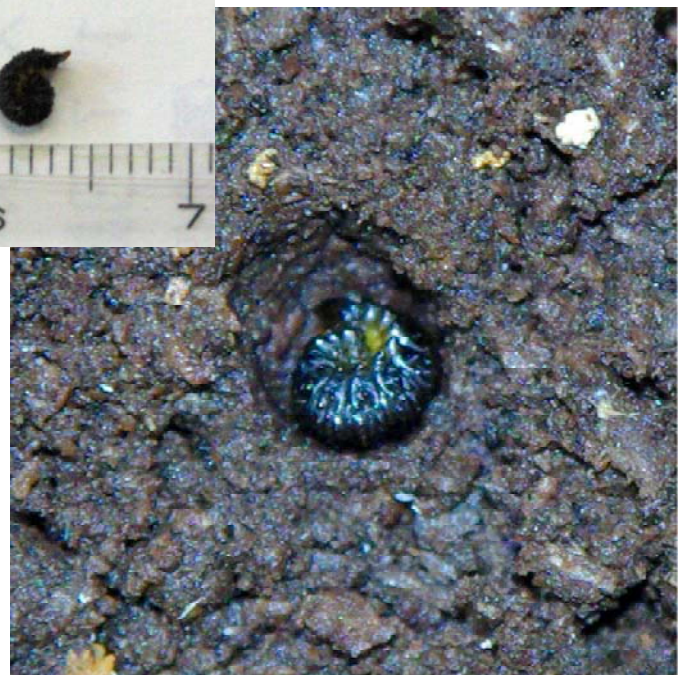
幼虫はどうでしょう。土の表面をならしてみると、一頭の幼虫が菌にやられていました。幼虫も全滅かと思いき、浅く土を削ってみると、ポコッと穴があいて幼虫が丸まっています。**蛹室**です。土中蛹化の予想は当たっていました。大きさは直径4mmの縦穴で長さは1cm、上端で1cm程の深さです。壁は滑らかで、カブトムシのと似ています。葉から離れて2週間ほどですが、まだ前蛹にもなっていません。このまま越冬して春に蛹化の可能性もありそうです。ほとんど動きませんが色艶も良く健康そうです。掘り出してしまった彼にはオアシスの人工蛹室で観察対象になってもらいます。ほかの連中は春まで封印です。



菌にやられた幼虫



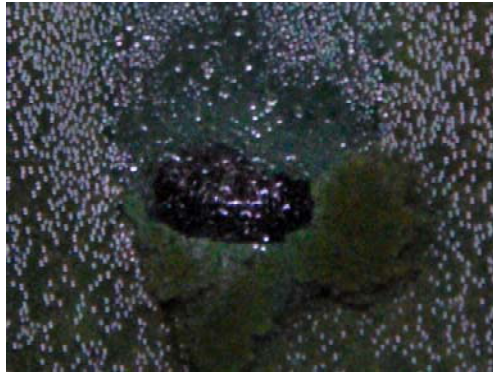
蛹室内の幼虫



9月24日(水)



人工蛹室のケース



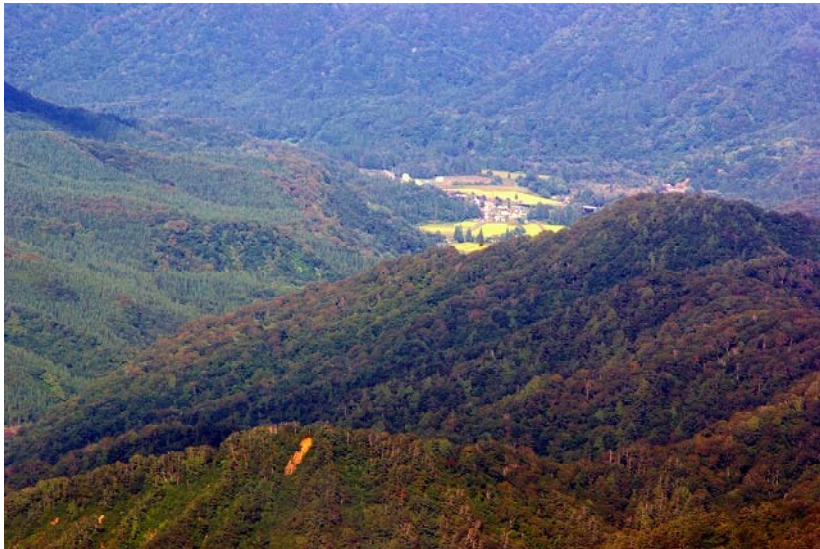
人工蛹室内の幼虫

人工蛹室のようすです。

投入直後は、寝心地が悪かったのか、歩き回って壁をならして？いましたが、今はすっかり熟睡しています。

現地状況

朝日連峰寒江山山頂から大井沢の根子集落を遠望すると中崎山周辺にも被害が見られました。これより上部には被害は認められません。(写真は9/22)



おまけ



センター屋上に干してあったトチの実に飛来したシギゾウ sp. 産卵に訪れたのか、単なる通りすがりか？ (後日記：トホシオサゾウ = ツユクサ食いでした)

10月1日(水)



水滴がおさまったので再度撮影。変化はありません。時々オアシスの屑が動いているのでたまには起き出しているようです。

10月2日(木) 現地状況(鳥海高原家族旅行村)



被害木はすっかり葉を落としています。



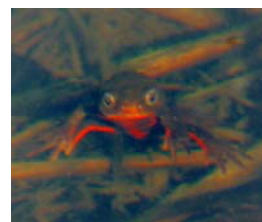
2匹だけ幼虫が見られました。これは約10mm、もう一つは約6mm



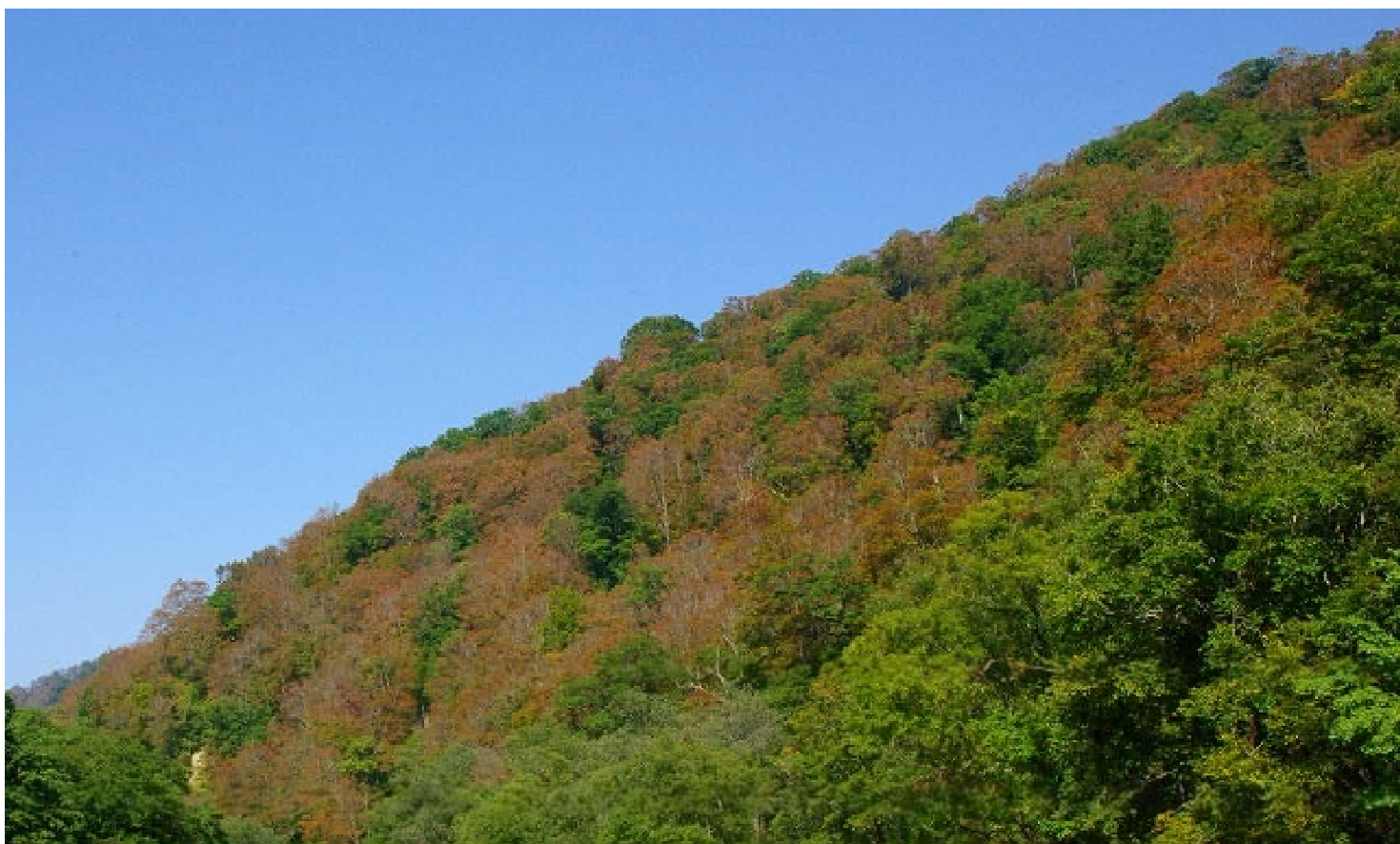
自動販売機に封印された成虫

番外編 イモリ

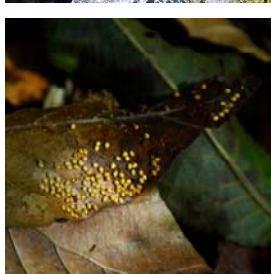
旅行村の池にはイモリがたくさんいました。



10月3日(金) 現地状況(大鳥方面)



菌にやられた幼虫



卵(死卵と殻)



大鳥集落の自販機にも

大鳥流域もやられていました。ほとんどの被害木は落葉しています。根元の枯葉をめくると、飼育下と同じように菌にやられた幼虫がいました。死んだ卵や卵の殻もありました。冬眠体制のタゴガエルも掘り出してしまいました。



起こされたタゴガエル

10月20日(月)

山の木々もすっかり色づいています。落葉の下のハムシの様子を見に行かねばとは思いつつ未だ行けずにいます。たまたま以前撮った写真を見ていて、菌で死亡した幼虫が葉上にいるのを見つけました。9月6日の大越峠のもので、この日記6ページ左下の写真にも部分的に見えていました。飼育個体とは別の産地です。10月3日の大鳥のものと考え合わせると、野生でも広い範囲に同様の菌はいるようです。



拡大写真。
ぼけていますが、菌にやられた幼虫です。



人工蛹室の彼氏は変化ありません。このまま幼虫で越冬するのは確実のようです。そろそろ人には暖房が必要な時期なので、温度変化のない倉庫で冬を越してもらおうと思います。pdfのサイズも大きくなってしまったところで、ひとまずこの日記はお休みにします。

来春、動きがあれば、お知らせします。それではまた。

たくさんのアクセス、ありがとうございました。

2009春

人工蛹室の彼氏は4月中旬まで変化ありませんでしたが、ゴールデンウィーク明けに死亡を確認。昨年死亡個体のような白い菌は見られず、「融けた」状態。土中の者も同様でした。失敗の原因は高温と思われます。残念!

後日談

[ウエツキブナハムシのページへ](#)

[朝日山地森林生態系保護地域周辺のウエツキブナハムシ被害分布状況](#)

[森林病虫害情報「ウエツキブナハムシ大発生」2008に戻る](#)

[ホーム（朝日庄内森林環境保全ふれあいセンター）に戻る](#)

[観察日記 2009へ](#)